
壁

小日向ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壁

【Nコード】
N6817K

【作者名】
小日向ひなた

【あらすじ】
結婚10年目の夜から、夫は帰って来なくなった。夫に何があったのか、事故か事件か？不安が明日香を包む。そんな妹を放っておかず、毎日様子を見る来る姉。姉がどんなに心配しても、明日香は元気が無いままだ。夫はどうして帰ってこないのか？明日香は、どうなってしまうのか？

第一部（前書き）

帰ってこない夫を待って、妻はどうなってしまふのか。最後まで、お付き合いいただけると、大変嬉しいです。

第一部

明日香が結婚して10年が経つ。

10年前、明日香はまだ23歳、夫の正人は28歳だった。

二人は、3年間の恋愛期間を経て結婚した。

誰にも、邪魔する事の出来ない深い愛情で結ばれた二人だった。

あれから10年。

明日香は鏡に映る自分を眺めた。

落ち着いた雰囲気と、穏やかな笑顔、そこに写っているのは、30代を迎へ未だ若々しさを忘れる事の無い、控えめな女性が写っていた。

子供がいないいいか、近所の奥さんのように、老けた感じはしない。専業主婦を長く続けているので、時間に追われるような生活感が感じられない。

家の中で、愛する夫が帰宅するのを待つだけの毎日。

それでも、明日香は幸せを感じていた。

以前は、子供が出来ない事を嘆き哀しみ、正人に離婚を申し出た事もある。

子供が出来ないのは、自分のせいだと、正人に申し訳なく思ったのだ。

しかし、正人は、そんな明日香を労わり、慈しんだ。

子供がいなくても、愛し合い、共に時間を過ごす事の方が大事だと言ってくれた。

これ以上の幸せがあるだろうか。

明日香は、時計を眺めた。

毎日、決まった時間に正人は電話をしてくる。

それは、夕方6時。

『これから、帰るよ。』という連絡だ。

その電話があると、30分後には玄関に車が止まる。
残業というものは、ほとんど無い。

決まった時間に出勤し、決まった時間に帰宅する。

明日香の手料理に、舌鼓を打ち、その日に何があったかをお互いに話し合う。

しかし、家からほとんど外に出ない明日香には、正人に話して聞かせるような話は無く、大概正人が話すことを嬉しそうに聞いているだけだった。

今日も、そろそろ電話が掛かってくる時間だ。

明日香は、台所で10年目の夜を素晴らしいものにする為に、料理の仕上げに取り掛かった。

（今夜は、特別な夜だから。）

心が弾む。

（正人さんは、覚えているかしら。）

（毎年、この日の為に、料理のレパートリーも少しずつ増やしてきたわ。）

（今夜だって、きっと喜んでくれる。）

オーブンが温まり、チキンを入れる。

ソースを火に掛け、ゆっくりと回す。

時計が6時を知らせた。

電話が鳴った。

「はい・・・正人さん？ ええ、待ってるわ。」

いつもと同じ内容の電話。

「今から帰るよ」と言っただけで電話が切れた。

台所に戻り、冷蔵庫を開ける。

ワインが冷えている。

（今夜は、このワインでいいわよね。）

ワインを確認して、冷蔵庫を閉める。

テーブルをセットし、食器を並べる。

もう一度、鏡に写る自分の姿を確認し、小さく微笑む。

時計を見ると、30分が過ぎている。

（いけない！ゆっくりしてたら、もう帰ってくる時間だわ。）

ところが、40分経っても、50分が経過しても車の音は聞こえてこなかった。

（そうだわ、きつときつと、今夜の為にプレゼントを買いに行ったのかもしれない！）

（私を驚かせようと思っているんだわ。）

1時間が過ぎた。

（どうしたの？何故、帰ってこないの？）

時計は無造作に進んでいく。

長針と短針の追いかっこを、じっと眺め続けるしかない。
2時間が過ぎた。

（どうしたの？ 正人さん！）

（お願い、早く帰って来て！）

（サプライズなんて、要らないわ！）

不安が不安を呼ぶ。

もしかしたら、事故にでも遭ったのではないか。

明日香の脳裏をよぎる、不吉な想像。

振り払おうとしても、振り払えない、夫正人が血だらけになって、
自分と呼んでいるのではないか。

そんな想像が湧き上がる。

時計が深夜を告げる。

（せっかくの夜だったのに。）

（10回目の結婚記念日なのに。）

（どうして、帰って来てくれないの？）

（何があったの？）

哀しさと、不安が入り混じる夜。

明日香の目から、大粒の涙がこぼれる。

ソファーに座ったまま、動く事も出来ない。

「お願い！帰って来て！！」

声にならない声が、一人ぼっちの部屋に空しく響く……………。

翌朝、ソファーに座ったまま、寝てしまったことに気が付いた。

（正人さん！）

明日香は、目を覚ますと正人が帰って来て、ベットで寝ているのではないかと、寝室へ急だ。

きっちりと閉まっている、寝室のドアを勢い良く開けるが、そこには誰も居なかった。

ベットに近寄り、ぬくもりを探すが、誰が寝た気配も無い。

明日香は、ベットに手を置くと崩れるように座り込んだ。

（帰って来なかったのね。）

（どうして……………？）

（何があったの？）

涙が流れる。

明日香の時間が止まった。

第一部（後書き）

お読み頂きありがとうございます。感想を書いていただけると、大変嬉しいです。今後の参考にもなりますので、よろしく願います。では・・・・この続きは、又明日。

第二部

正人が帰らないまま3日が過ぎた。

明日香は、いつ正人が帰宅しても大丈夫な様に、一睡もせず待っていた。

どんなに、酷い顔になっているか、それすら気にする余裕も無く、ただひたすら、ソファアに座って待ち続けた。

3日目の朝、電話が鳴った。

反射的に電話に出る。

「正人さん!？」

相手は驚いたように、一瞬の間を空け

「正人さんがどうしたの？」

と返事を返してきた。

「正人さんじゃないのね・・・」

「どうしたの？明日香？」

電話の主は、双子の姉の明利だった。

明利の声が聞こえた途端、明日香の目から大粒の涙が溢れた。

明利と明日香、一卵性の双子で、子供の頃はいつも同じ服を着て、同じ遊びをしていた姉妹だ。

いつの頃からか、二人の性格が徐々に変わり出した。

明利は積極的で社交的に、それは太陽の様に明るく、友達も多かった。

その逆に、明日香は大人しく、消極的な女性へと変わって行った。まるで、明利の陰に隠れる月の様に。

それでも、二人はいつも仲が良かった。

それだけに、今、明利の声を聞いた途端、明日香の張り詰めていた心の糸が切れたかの様に、泣き出してしまったのだ。

ただならぬ明日香の気配に、明利が叫んだ。

「何かあったのね！今からそっちへ行くから、待ってて!!」

「明利ちゃん・・・私・・・」

「待ってるのよ!」

電話が切れた。

明日香は受話器を握り締めて、泣きじゃくった。

涙が頬を伝うのを、拭う事も無く。

しばらくすると、玄関にエンジン音が聞こえた。

明利が来た事は分かっているが、動く事が出来ない。

チャイムが鳴る。

明日香はゆっくり立ち上がると、よろけながら玄関へと向かった。

やっこの思いで玄関のロックを外し、ドアを開けると、そこに明利が大きな袋を抱えて立っていた。

「明利ちゃん。」

弱々し気に明利の名を口にし、緩やかな笑みを浮かべた。

しかし、それは生気の無い、いつもの穏やかで、全世界の幸せが全て自分に集まっている様な笑顔の明日香ではなかった。

「明日香?」

明利は、明日香を抱きしめると、涙が出そうになるのを堪えた。

（こんなになって・・・一体何があったの?）

二人は居間へと戻った。

明日香をソファアに座らせ、玄関に置いて来た荷物を取りに戻る。

その時、何かが違う気がした。

何かが足りないような・・・変な気分には捕らわれたのだ。

（何だろう・・・）

しかし、いくら考えたところで、分かるはずもなく、明利は明日香の元へと戻った。

ソファアに座っている明日香は、まるで幽霊の様に、消えてしまいうように見えた。

「明日香? お腹は空いてない?」

明利は明日香の顔を覗き込んで聞いた。

明日香は首を左右に振るだけだった。頬には、涙の跡がくっきりと残っている。

「どうしたの？」

「明利ちゃん・・・正人さんが・・・正人さんが、帰って来ないの・・・」

と言うと、ワッと泣き出した。

両手で顔を覆い、体中の水分が無くなるのではないかと思われるほど、泣き続けた。

明利は、明日香の横に座り、ただ黙って明日香の気持ちたちが落ち着くのを待った。

子供の頃が思い出される。

（あの頃は、二人で泣いたよね。でも、今は私は泣かないよ。）

（私が、明日香の涙を吸い取ってあげる。）

いつまでも、いつまでも泣き続けた。

第二部（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。この続きは、又明日・
・・・感想をいただけると嬉しいですよ^^

第三部

1時間程すると、明日香はゆっくりと話し出した。

夫正人が帰宅しなかった夜の話。その後の3日間、ただひたすら夫の帰りを待ち続けた長い時間。その間、一睡もせずに不安に耐えてきた事、全てをゆっくりと話した。

どうして、何故？

話ながらも疑問が胸の奥に渦巻く。

もやもやした想いがどうにもならない。

「そうだったの。辛かったね。」

「・・・・・・」

優しい言葉が、涙を誘う。

「何も食べてないの？」

首が縦に揺れた。

「何か食べよう。」

明日香の首が左右に揺れる。

「明日香、鏡を見た？ 酷い顔だよ。そんな顔じゃ、正人さんが帰ってきたら驚くわ。」

明日香が明利を見つめて、恥ずかしそうに微笑んだ。

「まずは、何か食べましょう。私ね、多分明日香が何も食べてないと思って、たくさん買ってきたのよ。明日香が好きなもの！」

玄関から持ってきた、大きな袋を開ける。

袋の中から、缶詰、カレー、ヨーグルト、調理パン、コンスープの缶詰など、全て温めれば食べる事が出来るものばかりだ。

「明日香みたいに、料理が上手じゃないから、作るって訳には行かないけど。」

でも、どれも美味しいわよ。」

双子とは言え、全く同じに育つわけではない。明日香は料理や手芸が好きで、明利は家の事は適当に粉すといった具合だ。

「ね！何か食べましょ！」

明日香の首が左右に揺れる。

明利は哀しくてたまらなかった。

（多分、正人さんは女の処に行って帰って来ないんだわ！）

（こんなに明日香が哀しんでいるというのに。）

そう、半年程前に正人の浮気がばれた。

ばれはしても、明日香は何も言わなかった。

それは、浮気相手の挑戦状とも思われるような罠だった。

正人の上着のポケットに、こっそりと忍ばされていた片方だけのイヤリング。

そのイヤリングが明日香に語りかけてきた。

『正人は私のものよ。妻だろうが、何だろうが関係ないのよ！』

明日香は、そのイヤリングを元通りポケットにしまった。

何も言わず、平和な毎日を壊さないように息を詰めて生活が続けた。しかし、ある日、相手の女が乗り込んできた。

それも、正人と明日香だけの時間に。

大切な二人の時間に、土足で乗り込んできたのだ。

明日香は硬直した。

知らずに通り過ぎる事が出来たなら、それでよかったのだ。

明日香のいないところで、何が起こつていようと、正人が毎日、いつもの時間に電話をかけてきて、いつもの時間に帰って来てくれたら、それだけで良かった。

女は皮肉な笑いを浮かべながら、正人にしなだれ掛かり、正人は自分のものだと主張した。

正人は、ただ困った顔をするだけだった。

明日香に弁解する事も無く、女と出て行った。

翌日、帰宅すると一言『スマン』と言っただけだった。

『いいのよ、正人さん。あなたが悪いんじゃないわ。私はあなたを愛しているから。』

明日香は、正人が戻ってきたという、それだけで全て許す気になっ

ていたのだ。

明利がこの話を聞いたのは、2、3ヶ月後の事だった。

明利は激怒したが、明日香が

『もう、過ぎたことよ。あれ以来、正人さんはちゃんと帰ってくるわ。

それでいいのよ。』

と笑って言った。

結局この件は、それきりとなり、その後女が乗り込んでくることは無くなったが、明利は正人の浮気が終わっているとは思っていないかった。

第三部（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。感想を書いていただけると、今後の参考になりますので、よろしく願います。それでは、又明日。

第四部

明利にスープを温めてもらい、半分程飲むと気持ちが落ちついたのか、ベットに横になることが出来た。久しぶりに、ベットに横になると自然と目が重くなってくる。

明利は、そんな明日香のそばで、ずっと手を握っていた。

（こんなに疲れて、苦しんで、可哀想な明日香・・・もっと、早くに電話していれば・・・）

明日香が眠りに落ちると、明利はそっと、涙を流した。

随分寝てしまったようだった。外は大分暗くなっている。

明日香は、目が覚めると鏡の中に自分を写した。

やつれた、生気の無い顔。

化粧も剥げて、髪も艶が無くなっている。

（こんな格好を正人さんに見せられないわ。）

明日香は、髪をセットし化粧を直した。

洋服を着替え、もう一度鏡を見つめ時計に目をやった。

（まあ、こんな時間！正人さんから電話が来るわ。）

急いで、居間へ行くと明利が明日香を見た。

「明利ちゃん、さっきはありがとう。」

綺麗に化粧を直した明日香が、はにかみながら明利を見た。

「少しは元気になった？」

「ええ、やっぱり明利ちゃんね。」

「何が？」

「明利ちゃんが傍にいたと思ったら、安心して眠れたわ。」

「いつも一緒だったものね。」

いつも一緒だった、子供の頃はずっと一緒にいたのだ。

時計が6時を告げた。

その瞬間、明日香が受話器を取った。

「正人さん？ええ、分かったわ。待ってるわ。」
穏やかな明日香の声だった。

明利は、不思議に思った。電話のベルは明利には聞こえなかったのだ。

それでも、明日香は嬉しそうに話をしている。

相手が何を言っているのかは分からない、ただただ明日香だけが、緩やかにうなづくだけだった。

1分と経たずに電話が切れた。

明日香は、ぼんやりと受話器を置くと、電話をいとおしそうに撫でた。

「いいのよ、大丈夫よ。きっと、帰ってくるわ。」

誰に言うわけでもなく、明日香がつぶやいた。

「毎日、電話が掛かってくるの。」

明日香がソファアに座りながら、明利に言った。

「毎日？ここ、3日間？」

「そうよ。彼は、本当は帰って来たいのよ。」

「・・・・・・・・」

「でも、帰れない理由があるの。きっと、何か理由があるのよ。」

明利は、電話の音が聞こえなかった事を明日香に言わずにいた。

それはきつと明日香が、瞬時に受話器を取った為に、ベルが鳴らなかった為だろうと考えたからだった。

「正人さんは、何て？」

「いつもと同じよ、もうすぐ帰るからって」

「・・・・・・・・」

「だから、大丈夫。私、待ってる。」

眠ったせいか、気丈に振舞う事が出来るようになったらしい。

明日香は、りと背を伸ばし、まっすぐ前を向いた。

明利にも家族がいる。

「ごめんね。明日、又来るから。」

そう言い残して、明利が帰って行った。
又、一人きりの夜が来た。

暗い部屋で、明日香はぼんやりと壁を眺めた。
その壁の向こうには、もう一つ部屋がある。

正人の書斎として、作られた部屋だ。

だが、正人がいなくなった今、部屋のドアには鍵が掛けられ、正人の聖域を汚すものは、何人たりとも許さぬといった雰囲気をもし出していた。

勿論、鍵を掛けたのは、明日香自身なのだが。
壁を見つめながら、想いは正人との日々へと巡る。

正人がいるだけで、笑顔になれた。

正人の息が、心地よかった。

正人の背中が、安らぎだった。

涙が流れる。

目を瞑り、夢の世界へゆっくりと落ちていく。

正人の声が聞こえた。

激しく言い争っている声。

「そうじゃない！違うんだ！」

明日香は、正人の背中を見ていた。

（正人さん、どうしたの？）

声が出ない。

声を掛けたいのに、声が出ない。

「分からないのか！」

（誰に言ってるの？）

（どうして怒鳴っているの？）

正人が振り返った。

憎しみの表情。

（何故、そんな顔をするの？）

誰かの声が聞こえた。

（誰?!）

罵声が聞こえる。

何を言っているのか分からない。

二人の言い争いは続いていた。

目が覚めると、部屋はまだ暗く、海の底の様に静かだった。

「今のは・・・夢？」

正人さん、あれは誰なの？」

両手を握り締めながら、身震いが走った。

ただの夢？

それとも、正人は何かを言いたいのか？

長い夜が、もうすぐ明ける。

第四部（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。感想を書いていただけると、嬉しいです^^ よろしくお願いします。では、続きは又明日。

第五部

翌朝、明利がやってきた。

「明日香、夕べは眠れた？」

昨日のままの服装。

何も変わっていない、明日香。

明利は明日香の隣に座ると、明日香の髪を撫でた。

「分からないの・・・」

明日香がぼんやりと答えた。

「分からないって、正人さん？」

「夕べ、夢を見たの。正人さんと誰かが口論してたわ。」

「・・・」

「正人さんの顔が、憎しみに満ちて・・・」

私、声を掛けたかったけど、声が出なかった。」

体が震える。

「怖い・・・怖い・・・正人さんは、何か言いたいだよ。」

でも、私には分からない。」

涙が流れる。

「明日香・・・うちに来ない？」

「・・・だめ・・・」

「どうして？」

「正人さんが電話をしてくるわ。」

「でも、帰ってこないのよ。」

「いいえ、帰ってくるわ。私が電話に出なかったら、正人さんは心配するわ。」

「・・・そう・・・そうね。」

それ以上は、何も言えなかった。

出来る事なら、自分の家に連れて帰って、ゆっくりと休ませてやりたかったが、明日香がそれを望まないのなら、どうする事も出来ない

い。

その日も、ただじっと座り続ける明日香を見つめるしかなかった。

明日香を見つめながら、明利はある決意を固めた。

（あの女の処へ行こう！そして、正人さんを連れて帰ってくるのよ！）

明日香は、うつろな目を壁に向けたまま、悪戯に時間が過ぎるに任せていた。

こうして、時間が過ぎ、6時になれば正人から電話が掛かってくる。それがせめてもの、救いだった。

その瞬間こそが、一日の全てだった。

何かを口にすることも、眠る事も無い、ただひたすら、時が刻まれていく事だけが、明日香の願いだった。

（正人さんの声が聞きたい。早く、早く時が過ぎてくれれば……）

深い悲しみの中で、明日香の願いはそれだけだったのだ。

夜が来て、又一人になる。

壁に向かい、正人との語らいが始まる。

正人の笑顔を思い出し、涙しながら、目を瞑る。

そして、夢に現れる正人は……。

同じ事が繰り返された。

毎日、毎晩、同じ事が。

そして、同じ夢を見た。夢の中で正人に会えるのは嬉しかったが、正人が何を言いたいのか、口論している相手が誰なのか、何度見ても分からなかった。

ギリギリの精神状態。

そんな日々の中、明利は女の家を訪ねていた。

繁華街に近い、安アパートに女はいた。

安物の香水を点け、真っ赤な口紅と真っ赤なマニキュア。

どう見ても、普通の職業ではない事が分かる。

女はタバコをくゆらせながら、訝しげに明利を見た。

「それで、何の用？」

悪びれるわけでもなく、女が煙を吐き出す。

「眠いのよね、早く用件を言ってよ。」

明利は、はっきりと通る声で告げた。

「正人さんを返してもらいに来たわ。」

「正人？」

「そうよ、もう一週間もあなたの所に入り浸ってるでしょ！」

「はぁ？ 何の事よ。」

迷惑だと言わんばかりの口調だ。

「貴方と正人さんが続いている事は、分かっているのよ。」

「そう。だったら？」

「返して！」

女は可笑しそうに顔を歪めた。

「返せない、と言ったら？」

「無理やりにでも、返してもらうわ！」

「そう。でも、何であたしの処にいると思うわけ？」

女は、爪を眺めながら笑った。

「貴方しかないでしょ！」

「ふーん。要するに、正人は奥さんを捨てたわけね。ジョーハツしたんだ。」

「蒸発ですって！自分で隠しておきなごら！」

「隠せるわけ無いでしょ。あの人は大人だよ。」

「そうね。大人だわ。それでも、貴方が！」

「探してご覧よ、隅から隅まで。それで気が済むならね。」

女は、面倒だと言わんばかりにドアを大きく開けた。

玄関に一步入って、部屋を一回り眺めた。

そこは到底隠れる場所など無さそうな、狭い部屋だった。

それでも、明利は押入れを検めさせてもらうと声を掛け、部屋に入

った。

しかし、押入れにもベッドの中にも正人はいなかった。
それどころか、正人の匂いのするものは一つも存在しない。

女は、大声で笑った。

「ほらね、いないでしょ。居る分けないのよ。」

「どうして!」

明利が振り返り、女と対峙した。

「どうしてって、そっちの方が分かってるでしょ。」

「知らないわ!」

「そう・・・」

女は新しいタバコに火を点けた。

大きく吸い込み、煙を吐き出す。

「あの人の・・・アスカって言ったかしらね、奥さん。」

「明日香よ。」

「虫も殺さないような顔をしてる割には、凄いよね。」

「・・・」

「1ヶ月前だよ、あたしの部屋に来て、あんたと同じように怒鳴って、二度とダンナに近寄るなっ。

包丁を突きつけて来たんだよ。」

「明日香が・・・?」

信じられなかった。

あの、気弱な明日香が、そんな大胆な行動が取れるはずがないのだ。
この女は嘘を言っているのだろう。

明利は、女を睨みつけ

「そんな事があるわけないわ。」

「信じないんなら、それでいいさ。でも、事実だからね。目がうつろで、あれは頭が可笑しいんじゃないの?」

「そんな事、ある分けないわ!」

「ふん・・・」

女は面白そうに笑った。そして、言葉を繋いだ。

「あたしさあ、そういう面倒なの嫌いなんだよね。」

「面倒が嫌い？」

「そうさ、男なんて別に、どうでもいいんだよ。」

「どうでもいい割には、半年前に家に乗り込んできたじゃない！」

「ああゝ あれね。」

女は喉の奥で又笑った。

「あんまり、正人が奥さんの話ばかりするからさ。奥さんが可愛いくせに、あたしの処に来る。」

可笑しいじゃないか。だから、乗り込んだんだよ。」

「・・・・」

「それでも、あの人は変わらずあたしの部屋に来てたけどね。どうしてか分かる？」

「さあ？」

「奥さんが重いんだってさ。」

「重い？」

「そう、重すぎるんだって。だから、たまに軽く話が出来るあたしのところに来る。」

そういう事。」

明利は、意味が分からなかった。

あの、明るく可愛い笑顔の明日香の、どこが重いのか。

いつでも、夫を想い、夫だけを信じて生きている、妻の鏡とも言える明日香。

「分かったら、帰ってくれる？ ここには居ないし、あの事があつてから、来るなつてはつきり言っただからさあ。」

「じゃあ、今、彼はどこに居るの？」

「知らないね。会社にでも聞いてみれば？ 結構、出張とかじゃないの？」

馬鹿にしたような笑いだ。

本当に、出張だったら妻に言わずに行くはずが無いのだ。

何も言わずに姿を消したという事が、どういう事か、女は楽しそう

に肩を揺らした。

第五部（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。感想を書いていただけると、ありがたいです。では、この続きは、又明日。

第六部

明利は、女の言う事全てを信じた訳では無かったが、会社へ電話を入れてみた。

会社へ連絡するという事は、最後の手段としてやりたくは無かったが、他に手立てが無かったのだ。

出社していれば、本人に事情を聞けば済むが、出社していなかったら。

この事が、会社にばれたらどうなる？

言葉を慎重に選ばねば、その後、正人が働き辛くなってしまう。

明利は、ケイタイを眺めながら、言葉を捜し、正人の会社へと電話を掛けた。

事務の女性が電話に出た。

「大塚正人の家の者ですが・・・」

次の言葉だ。

躊躇いながら、次の言葉を口にしようとした時

「ああ、大塚さんですか。お加減はいかがですか？」

「・・・あの・・・体調がまだ・・・」

咄嗟に、【体調】と口にした。

「連絡が無いので、どうしたか社内でも心配してたんです。風邪に
しては長いですし。」

これで、出社していない事は分かった。
「あの、私、親戚の者なのですが、いつから休んでいるのでしょうか？」

「あら、奥さんではなかったんですね、失礼しました。

そうですね、もう一週間です。無断欠勤なので・・・ケイタイに
電話しても、誰もお出にならないから、入院でもされたのかと。」

「無断欠勤ですか？」

「ええ、ですから奥様も大変なのだろうと、連絡を待っていたとこ

ろなんです。」

「そうでしたか、体調が悪いのは聞いていたのですが、私も詳しい事までは分からないので。

それでは、自宅の方に連絡を入れてみます。

ありがとうございます。」

そういつて、明利は早々に電話を切った。

これ以上、余計な事を話して、怪訝に思われてもならない。
いや、最早思われているかもしれない。

『無断欠勤』

その言葉が、女が言った『蒸発』とダブった。

(正人さんは、本当に蒸発したのかしら・・・)

(それなのに、何故、毎日決まった時間に電話してくるのだろう。)

(あの電話は、本当に正人さんからなのかしら?)

疑問が疑問を呼ぶ。

蒸発・・・

明利の胸に引かかる『蒸発』の二文字。

本当に、正人は蒸発したのだろうか・・・?

明日香の居る家へ向かう。

預かっている玄関の鍵で、ドアを開け中に入る。

暗く、湿った感じが家を覆っている。

その感覚は、明日香の哀しみそのもののような気がする。

明利は、玄関で足を止めた。

最初に、この玄関に立った時、何がしかの違和感を感じた。
あれは何だったのか、未だに分からずにいる。

居間へ向かい、ソファーに座り続ける明日香に近寄る。

憔悴しきった姿が痛々しい。

ここに居るのが、生身の人間なのか、それすら信じられない。

「明日香、私が居るうちに、少し寝たら？」

「明利ちゃん・・・夢を見るのよ。毎晩同じ夢なの。何故、正人さんはあんな顔をしてるのかしら。」

「夢だから。気にしたらダメだよ。」

「そうね・・・でも、彼は・・・きつと、何か言いたいのだと思うの。」

やつれた明日香。

はかな気で、弱々しく、ガラスのように壊れそうな明日香。

こんな可憐な女性が、包丁を持って人を脅す事などできるはずが無い。

やはり、あの話は女の作り話なのだろうと思った。

部屋の中が徐々に暗くなってきた。

明利は、部屋の電気を点けようと、ドアの近くまで歩を進めた。

スイッチに手が掛かった時、明日香が立ち上がった。

時計が6時を告げる。

明日香が受話器を取った。

やはり、電話のベルが聞こえない。

「もしもし！」

明利が明日香の傍に近寄る。

「もしもし、正人さんね。」

明日香の声が優しく響く。

受話器から声が聞こえるであろう程、近くまで明利が近寄った。

「ええ、ええ・・・そうね。分かったわ。」

明利が反射的に受話器を取り上げた。

「何するの！？明利ちゃん！」

「もしもし！正人さん！」

受話器から聞こえてくるのは、ツーーーという音。

電話が切れた訳ではない。

これは、最初から掛かって来ていないのだ。

明日香は毎日、掛かってきていない電話に向かって話をしていたの

だ。

明利は背筋に冷たいものを感じた。

明日香が、明利の手から受話器を？ぎ取り、再び電話に話しかける。

「ええ。待ってるわ。大丈夫よ。……待ってるから。」

静かに電話を切った。

明日香の微笑み。

安らいだ笑顔。

明利は、その笑顔に異常なものを感じていた。

第六部（後書き）

毎日掛かってくる電話。壊れていく明日香。この続きは、又明日。
（感想お待ちしております^^）

第七部

受話器を置いて、ソファアに戻った明日香は、又元の場所で壁を見つめ出した。

来る日も来る日も、同じ場所と同じ壁を見つめている。

明利は、明日香の横に座り、明日香の横顔を眺めた。
うつすらと笑みを浮かべ、うつろな目。

ただ一点だけをじっと見つめ、微動だにしない。

明利は、明日香の中にただならぬものを感じていた。

（このままでは、明日香が壊れる）

そう、感じ出していたのだ。

（さっきの電話は、繋がっていなかった。）

（それなのに、明日香は誰かと話していた。）

（一体どうなっているの？）

頭の中で、ぐるぐると同じ事が巡る。

いくら考えても、辿り着くのは、一つだけ。

たった一つ明日香の精神状態が、異常をきたしているということだ。

「明日香？」

明日香が明利を見た。

見たといっても、顔を向けただけで、明日香の目に明利の存在は写っていないように感じる。

「明日香、分かる？」

ちよつと首を傾げて、ニッコリと笑った。

「何が？」

小さな声で答えた。

「私が誰か、分かる？」

小さく頷く、

「明利ちゃん」

明利は、安堵した。

もしかしたら、明日香はあまりの辛さに、別の世界へ行ってしまったのではないか。

そんな不安があったのだ。

「明日香、さっきの電話ね。」

「ええ……」

「誰と話してたの？」

視線を壁に戻し、明日香が微笑んだ。

「……正人さんよ」

「私が出た時……電話は、繋がっていなかったわ。」

明日香の反応が怖かった。

それでも口にせずにはいらなかった。

「……明利ちゃんには、聞こえなかったの？」

「何が？」

「正人さんの声が。……そう、彼は明利ちゃんには何も言わなかったのね。」

「明日香……そうじゃないのよ。電話が繋がっていなかったのよ。」

「

「正人さんがね、急に電話を変ったから、ビックリしてたわ。」

思い出し笑いを浮かべ、楽しそうに正人の名を口にする。

確かに、電話は繋がっていなかったのだ。

それでも、明日香は誰かと話していた。

明日香自身も話していたと思っている。

鳥肌が立った。このままでは、明日香が壊れる。

繋がっていない電話、相手がいない電話と話す。

その為に、来る日も来る日も同じ時間を送る。

こんな事をしていたら、確実に明日香が明日香でなくなる。

明利は、明日香の視線を追った。

書斎へと繋がる壁。

壁の向こうに何があるのか、明日香を引き寄せる、何がそこにあるのか。

明利は、明日香と壁を交互に見つめながら、このままではいけないと自分に言い聞かせた。

（何とかして、明日香を助けなくては！）

明日香を見つめながら、明利は自分に言い聞かせた。

言い聞かせながら、幼い日々が思い出された。

よく二人で遊んだ。

明日香が隠しているものを、明利は何でも見たかった。

明日香を押しつけてみようとする、明日香は必ず同じことを言ったものだ。

「明利ちゃん、見ちゃダメ！」

笑顔でそういうのだ。

そう言われれば余計に見たくなるものだ。

二人でキャーキャーと騒ぎながら、奪い合う。

そして、やっと奪い取り見てみると、それは奇妙に蠢く虫達だったりしたものだ。

びっくりして仰け反る明りに、明日香が言う。

「明利ちゃん、だから、見たらダメだって言ったじゃない。」

そう言いながら、楽しそうに笑うのだ。

明日香は、明利の驚く姿が見たくて、いつもいろいろな物を隠していた。

そんな明日香が、可愛かった。

キラキラと笑う明日香が好きだった。

二人は、どんな時も一緒だったのだ。

もう一度、もう一度、明日香の笑顔が見たい！

明利は拳を握り締め、明日香の為に何をすべきかを考え始めていた。

明日香の為に……。

愛する妹の為に……。

第七部（後書き）

最後までお付き合い頂きありがとうございました。感想を書いていただけると、嬉しいのです。さて、壊れていく明日香。明日香を助ける決意をする明利。この続きは、又明日・・・。

第八部

誰も居なくなった家。

明利は、明日も来るからと言い残して帰っていった。

明利が帰ると、明日香は安心したように、ため息を付いた。

「正人さん、やっと二人きりになれたわね。」

明日香が囁く。

まるで、そこに正人がいるかのように語り掛ける。

書斎へと繋がる壁に向かって。

正人の全てが書斎にあるかのように。

暗い部屋で、長い長い、たった一人の時間を壁を見つめながら過ごすのだ。

誰にも邪魔される事の無い、大切な時間を。

明日香は目を閉じた。

目を閉じれば、元気に笑う正人がいる。

明るい陽射しの中で、コーヒーを飲みながらくつろぐ正人がいる。

本を読み、笑顔を向ける正人がいるのだ。

明日香は幸せだった。

「必ず帰ってくるわよね。いつまでも、待ってます私。」

ソファーに体を横たえながら、空に手を差し出す。

その手を正人がしっかりと握ってくれたように、明日香には感じた。そして、正人に会う為に夢の世界へと落ちていくのだった。

夢の中の正人は、怒鳴っていた。

又、あの夢だ。

夢を見ながら、明日香は思っていた。

毎日同じ夢を見る。

「そうじゃない！違うんだ！」

正人の荒々しい言葉。

毎晩、この夢を見て涙している。
相手は誰？

どうして怒鳴っているの？

声にしたくても、声が出ない。

「何が違うって言うの！！」

はつきりと聞こえた、女の声。

「貴方はこうして、毎晩遅く帰ってくるわ！」

（誰？ この声は誰なの？）

今までの夢は、相手の声は聞こえなかった。

更に、その場所がはつきりとしてくる。

そこは・・・玄関だった。

毎朝、正人を送り出す、玄関。

女の声が更に正人を追いかける。

「どうせ、あの女のところでしょ！」

私より、あの女がいいんでしょ！」

（あの女？ 誰の事？ 正人さんが何をしたって言うの？）

「違うんだ！ 分からないのか！」

「分からないわ！」

正人が振り返り歩き出す。

女が悔しそうに、その場に佇み、何かを手にした。

憎しみの表情を浮かべる正人と、佇み悔しさに打ち震える女。

明日香は、女を見た。

整えられた髪、薄い化粧、若々しい姿。

（あれは・・・私・・・）

（どうして、こんな喧嘩なんかしてるの？）

分からなかった。

正人と喧嘩などしたことが無い。

それなのに、この荒々しい、修羅場といっても過言ではない場面。

一体、何を意味しているのか。

場面が飛んだ。

書斎だ。

書斎の中で、正人がバックに何か詰めている。

（何をしているの？）

そう思ったとき、明日香が入ってきた。

「何をしているの?!」

「出て行くんだよ。」

「何故? どうして出て行くの? ……あの女の所に行くのね!」

「そうじゃない!! こうして、喧嘩ばかりしていても仕方が無いんだよ!」

「分からない……分からないわ! ……私は、貴方の為に、こんなに努力してる。貴方の最高の妻であろうと……やっぱり、子供が出来ないから、私を捨てるのね!」

「そんな事じゃない!!」

二人が向き合い、沈黙が流れる。

正人が再び荷物を詰めながら言った。

「重いんだよ……君は。」

「重い? 私の何が重いのか!」

これ以上言わせるのかと言うと、正人は明日香に背を向け、机の上のものを片付け始めた。

何かしながらでないと、これ以上は続けられない。

そんな感じだった。

「君の、そういう……僕の為に、良い妻になろうとしている君自身が、重いんだ。」

怒鳴るわけでもなく、本当は言いたくないという想いが伝わってくる言い方だ。

正人の優しさが、二人のやり取りを見続けている明日香には分かる。しかし、夢の中の明日香には、正人の優しさは分からないようだ。た。

「私は……」

明日香が怒りで震えているのが分かる。

唇をかみ締め、うつむき、やつとの思いで言葉を搾り出す。

「貴方を愛しているから、……貴方の為に、努力してきたのに……」

「それが重いんだよ!! そうやって、何でも俺の為! 俺の為! 絶えられないんだよ!」

「……」

長い沈黙が続いた。

正人が静かに言葉を続ける。

「もう……終わりに……」

最後まで言い終わらないうちに、明日香の手が正人目掛けて振り下ろされた。

それは、正人の脳天を打ち砕いた。

あまりの恐怖で目が覚めた。

全身、汗でびっしょりと濡れていた。

暗闇の中、明日香は荒い息を止める事が出来なかった。

「あれは……私……」

自分の両手を開き、手のひらを見つめた。

この手で、正人を殺したのか?

分からなかった。

壁を見つめ、流れる涙をぬぐう事も無く、呟いた。

「そんなはず無いわ。私は、正人さんの為に努力しているのですもの。」

第八部（後書き）

最後までお付き合い頂きありがとうございました。夢の中で夫を殺してしまつた明日香、それが事実なのか、それとも病気による思い込みなのか？　この続きは、又明日。。。。。

最終話

朝になり、明利がやってきた。

明日香に朝食を用意し、食べるように勧めるが、やはり一口がやつとなのか、箸をおいてしまう。

「明日香、少しでいいの。少しでいいから、食べて。」

明日香の首が左右に揺れ、明利を見つめた。

その目は、うつろでどこを見ているのか分からないものだった。

「明利ちゃん、私夢を見たの。」

二人っきりのダイニングテーブルに明利も座る。

大分暖かくなってきたというのに、暖房を入れても寒く感じる。

それは、明日香の心そのものの様に、冷え切っている。

「又、同じ夢?!」

明利も疲れが隠せず、又かという想いが顔に出てしまった。

毎日、明日香の元へ通い、ソファアに座ったきり動こうとしない明日香の為に、できることを全てしてあげている。

家の事もしなければならず、いい加減限界が来ていた。

早く、明日香を家に連れて帰って、しかるべき医者に相談しなくては、これ以上は明利自身も参ってしまう。明利の夫からも、釘を刺されていたのだ。

しかし、そんな明利の心境など察する事も出来ず、明日香は続けた。

「昨夜のは、違うのよ。」

明日香がソファアに向かう。

いつもの場所に座り、じっと壁を見つめる。

「私ね・・・分かったの。」

明日香の傍により、そつとため息を吐く。

何としても、今日こそは明日香を家に連れて帰らねばならない。

その為に、どうしたらいいのか、明利は考えあぐねていた。

「何が分かったの？」

「正人さんの喧嘩の相手・・・あれはね・・・私。」

「そう・・・」

「驚かないのね。」

「夢でしょ。」

「そうね。私も最初は、そう思った。夢だから。自分では夢を支配できないから。」

「明日香の気持ちだが、そういう形で夢に現れただけじゃない？」

「・・・いいえ」

明日香が力強く首を左右に振る。

「あれは、私なの。」

「そう。ねえ、明日香、うちに行きましょ。」

「・・・」

又、壁に目を向ける。

「電話なら、転送すればいいじゃない。」

「・・・」

「明日香を一人にしては置けないのよ。でも、私にも家庭があるのよ。」

「・・・」

「もう、これ以上は、無理なのよ！」

明利の脳裏に夫の不愉快そうな顔と子供の顔が浮かぶ。

今日は、下の子が熱を出している。

本来なら、家に居てあげたい。しかし、明日香が気になる。

今の状態の明日香を家に連れて帰っても、いい結果が生まれるとは思っていない。

それでも、連れて帰らねば、明日香を助ける事は出来ない。

多少、強い事を言っても、今日は明日香を連れて帰ると決意していた。

「私が・・・殺したの・・・」

明日香の口から漏れる言葉。

明利が、絶句した。

（そんな風に自分を責めるほど・・・。）

「正人さんは・・・私が殺したのよ。」

「・・・だって、電話が来ているのでしょうか？」

「分からない・・・でも、きっとそうなのよ。」

明日香が泣き出した。

苦しみを体中で表現するように。

泣きながら、言葉を続けた、散り散りの言葉を。

それは、明日香の妄想としか思えなかった。

「正人さんは・・・本当は・・・」

明日香の話は、途切れ途切れで、理解するのが難しかったが、明利は何度か聞き返しながら、話を自分なりにまとめる事が出来た。

それは、明日香の妄想として、後で医者に話すために必要な材料となると判断したからだだった。

長い時間が、その作業に費やされた。

「明日香、じゃあ、正人さんはずっと帰宅が遅かったのね。あの女の所に行っていたから。」

「ええ、きっとそうよ・・・」

「それで、毎日喧嘩をしていた。」

「ええ、きつと・・・そう・・・」

有り得ない、と明利は思った。本当に喧嘩しているなら、二人に会った時に、もっとギクシャクした感じがあっても良さそうなものだ。それを全く感じなかったのだ。

「そして、最後の日に玄関で口論になって、正人さんを殺めてしまった。」

ワッと明日香が声を上げて泣き出した。

「それが、書斎での事だったと・・・」

声無く頷く。

「私・・・なんてことをしたの！愛していたのに、こんなにも愛しているのに。」

身もだえするように泣き崩れる。

（こんなに思い詰めてしまったら、精神的にも参るわよね・・・）
明日香をじっと見つめる。

（どうしたらいい？ 実際、殺したという妄想に取り付かれているのだから・・・）

明利は、じっと壁を見た。

その先に、書斎があることは分かっている。

明日香は、その書斎に正人の死体があると思いついているのだ。

それならば、書斎には何も無いと分かれれば良いのではないか。

明利は、立ち上がりリビングを出た。

廊下を歩き、余りの冷気に身震いしながら、書斎のドアの前に立つ。
ドアノブを回す。

（あら？ 開かない、鍵が閉めてあるのかしら？）

リビングにとって返すと、薄笑いを浮かべた明日香が座っている。
じっと、壁を見つめて。

その姿に、ゾツとしながらも明日香に声を掛けた。

「明日香、書斎のドア・・・」

明日香の首がゆっくりと、明利に向けられる。

さっきまで、半狂乱になり泣いていた明日香とは、まるで別人だ。
明利に恐怖が走る。

壊れていく、妹。

あんなに愛らしく、可愛らしい妹が、壊れていく。

助けられるのは、正人しかないだろう。

しかし、正人がいない今、姉妹である明利が助けるしかないのだ。

「書斎のドアが開かないけど・・・鍵、掛けるの？」

「・・・そうよ。正人さんがいるから。」

「正人さんが・・・本当に居るかどうか、見てみましょう。」

「ダメよ。」

「どうして？」

「正人さんが寝てるのよ。起こしたら、かわいそうでしょ。」

帰ってこないと言ってみたり、寝ていると言ったり、果ては殺したと言いつ出す。

（完全におかしくなってる・・・）

「とにかく、一度開けて中を見てみたいの！鍵を貸して！！」
口調が強くなる。

その口調に反応したのか、ポケットに手を当て、

「ダメよ・・・鍵を開けてはダメ・・・」

と口走り始めた。

恐怖で引きつる顔。

何を守ろうとしているのか、決して鍵を渡さないという決意のようなものが見える。

（力づくで取るしかないか・・・）

ほとんど食事を探っていない明日香は、日々体力が落ちている。

今では歩くことすら、やっとの状態だ。

今の明日香なら、簡単に鍵を奪い取る事が出来る。

勿論、やりたくは無い。

そんな事をして、明日香の為にならないことは分かっている。

しかし、早く事を終わらせたかった。

子供の顔がちらつく。

熱にうなされていた。

夫の顔が思い出される。

「子供と妹と、どっちが大切なんだ。」

出かけに夫が言った言葉だ。

確かにそうだ。だからこそ、今日は早々に帰りたいのだ。

子供と妹、どちらも大切だからこそ。

明利は、決心した。

無理やりでもいい、とにかく鍵を奪い、ドアを開け、明日香を妄想の世界から連れ戻すのだ。

そして、我が家へ連れて帰り、しかるべき医者に診せ、治療を開始する。

帰らぬ正人を待っていても、明日香が壊れていくだけだ。

「鍵を頂戴！」

明日香が立ち上がり、壁際へと逃げる。

明利は右手を差し出し、明日香ににじり寄る。

「明日香、本当に殺したのなら、書斎に正人さんが倒れているはずよね。」

自分の目で見て、正人さんがその場にいないければ、明日香が殺したなんて事無いって、分かるでしょ！さあ！鍵を出して！！」

「ダメよ！ダメ！」

ポケットから鍵を出し、両手で握り締め、誰にも渡さないと言い張る。

これ以上、言葉で責めても拉致が開かないと判断した明利は、明日香の手を力ずくで押し開いた。

鍵が床に落ちる。

すばやく、鍵を拾いリビングを出る。

「明利ちゃん！開けてはダメ！！止めて！！」

追いつがる明日香を突き飛ばした。

とにかく、開ける事。それしか頭に無かった。

鍵穴へ鍵を入れ、回す。

かすかに、鍵の開く音が聞こえた。

ドアノブを回し、ドアを開ける。

「ダメよ！見てはダメ！！」

書斎の中に入る明利。

書斎には、大きな本棚と、ずっしりとしたライティングデスクが、存在感を示している。

「ほら、明日香。誰も居ないわよ。」

そういいながら、窓へと近づく。

ライティングデスクへと回り込みながら。

カーテンを開けようと、更に一步を踏み出すと、足元に何かがぶつかった。

（何？）

視線を下げると、何か大きなものが横たわっている。

「これ……」

「だから、見たらダメだって言ったでしょ。」

いつの間にか、書斎の中に明日香が入ってきていた。

そして、デスクに立ってかけてあった、ゴルフクラブを握り締めた。

「正人さんは、毎日電話をくれるのよ。……毎日、6時にね。そうしなければ、いけないの。」

「……明日香……これは……」

信じられない光景だった。

毛布をすっぽりとかぶせられたそれは……。

「正人さんよ。私の事を重い女だって言ったわ、彼の為に努力したのに。」

そう言いながら、ゴルフクラブを両手で持ち、頭上に振り上げる。

「明日香……まさか……」

「明利ちゃん、だから、見たらダメだって言ったじゃない。」

明利の脳天に激痛が走り、生暖かいものが顔面に流れた。

遠のく意識の中で、玄関に感じた違和感が何であったのかを理解していた。

それは、いつでもそこにあったはずの、ゴルフクラブが無かった事だった。

明日香は、子供のような無邪気な笑みを浮かべて、繰り返した。

「明利ちゃん、だから、見たらダメだって言ったじゃない。」

【完】

最終話（後書き）

最後までお読みくださり、ありがとうございました。次回作品は【水遊び】をお送りします。小さな男の子と、母親のやり取りから、恐ろしいラストをご覧に入れます。興味がありましたら、お立ち寄りください。それでは又、お会いしましょう。。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6817k/>

壁

2011年1月30日11時32分発行